



都市の彩

福岡の景観は時代とともにその「表情」や「色合い」を変えています。とはいえ、いつの時代にも、福岡の印象が語られるときによく耳にするのが「都市と自然と歴史が調和した、バランスのとれたまち」というフレーズ。それはなぜなのか。現代までの福岡のまちづくりの歩みを見ていくと、その理由が少しずつわかってきます。

「自分たちの暮らすまちが、美しく快適で、豊かな自然や歴史、文化を育む住みやすいまちであってほしい」。そんな思いを「景観」という形にするため、さまざまな挑戦を重ねてきた福岡のまち。例えば「ゆとり」や「潤い」が豊かな暮らしのキーワードとして注目され始めた80年代、福岡

全国的に見ても、福岡には個性的な景観が数多く存在しています。

市では「彫刻のあるまちづくり」がスタート。さらに夜も景観を楽しんでもらうための「ライトアップ福岡」も始まりました。90年代に入って、アジアの拠点都市としての目標が明確になっていくにつれ、外国をはじめ他地域から訪れた人にも分かりやすいまちづくりを目指した「都市サイン整備」も実施。より洗練された表情が福岡の景観に加わることになりました。また「海に開かれたまち」という認識が高まり、これまでに以上に「海」をキーワードにしたまちづくりが進む中では、百道地区を中心に広がる未来型ビジネス街「ソフトリサーチパーク」など、それまでの福岡にはない新しい景観も出現し始めました。

こうして都市景観の成熟度が増していく中、「創造」や「育成」はもちろん、福岡らしい都市景観を「保つ」「守る」という観点からのまちづくりにも力が注がれるようになっていきます。例えば、歴史的かつ福岡らしいまちなみが継承されている地区の景観保全や整備が進められたり、まちづくりや景観づくりに市民みんなが参加するため、違反広告物を撤去する際などに法的な権限を付与された市民ボランティア「福岡市路上違反広告物追放登録員」も誕生しました。

景観は、眺められる対象「景」とそれを眺める「観」の相互の関係によって成り立っています。そう考えると「景観」というのは、そこで生きる人の価値観が色濃く反映されているもの、ということができるのではないのでしょうか。

まちづくり、景観づくりの主役である市民の皆さんと一緒にこれからはどんな「都市の彩」を見つけ育んでいけるか、ますます楽しみです。



彩 発見 福岡 ● 景観

ふと立ち止まり、いつも流れる景色をじっと観察すれば、気がつかなかった福岡の魅力が見えてきます。

建築物や屋外彫刻、そして活動に至るまで、福岡市民の生活に欠かせない「景観」。そのいずれもが福岡らしい、福岡にしかない魅力となつてまちのあちろちろに息づいています。今日もふと立ち止まり、目を凝らしてみると、見慣れた景色の中にまだ気づいていない「福岡に魅力を生み出している景観」が見えてくるかもしれません。市民の皆さんがあらためて福岡の景観に目を向け、まちへの愛着を深めるきっかけになつてほしいと、福岡市は1987年に「都市景観賞」を創設、市民の『推薦』によつてエントリーしたさまざまな景観に対して表彰を行ってきました。その数は24年間で189件にも上ります。

都市景観賞が創設25周年を迎える今回の「彩都」では、福岡の景観を再発見し、同時にこれからの景観づくりのあり方なども考えてみたいと思います。

25th saito CONTENTS

1 彩発見 福岡 ● 景観

2 INTERVIEW

林田 スマ (大野城まどかびあ館長)

水戸岡 鋭治 (デザイナー)

大塚 ムネト (ギンギラ太陽's主宰)

神田 紅 (講師)

ニック・サース (FUKUOKA NOW 編集長)

深町 健二郎 (プロデューサー)

8 Fukuokaについてひとこと

10 Fukuokaのまちを再発見しよう!

16 まちなみ写真コンテスト受賞作品

19 福岡市都市景観賞25周年に寄せて

20 福岡市都市景観賞歴代受賞作品 GUIDE MAP